

下関市の魚「フグ」を教材に小学校における地域と 連携した通年授業の実践及び児童へのアンケート結果

○井上美紀・園山貴之¹⁾・福住 繁²⁾・高田浩二³⁾

¹⁾ 下関市立しものせき水族館・²⁾ 下関市立垢田小学校・³⁾ 海と博物館研究所

下関市立しものせき水族館（以下、当館）では、2019年より新たに地域の教育資源を活用した地域連携型の海洋教育プログラムの構築を開始した。2021年は下関市立養治小学校第3学年20名を対象とし、年間で実施される「総合的な学習の時間（以下、総合学習）」の半分に相当する約35時間を使い、単元名「みんなで応援！～来て！見て！知って！海響館～」のプログラムを構築し、その連携授業を実践した。実践期間は2021年6月25日から2022年3月22日であった。

学習のねらいや目的を、水族館側では総合学習において当館の多様な利用を通じ生き物や環境などを効果的に学ぶなどとし、学校側では児童が主体的及び探求的に学習に取り組み、地域の特色や下関市の魚「フグ」を知る、フグや当館の魅力を伝えるためにできることを考え実践する力を育むことなどとした。

本プログラムは、地域の教育資源の中から下関市の魚「フグ」を軸に構築し、教材化を目指した。当館が年間を通じた総合学習での授業計画を提案し、そこに教員が学校独自の総合学習とキャリア教育の要素を加え、学校側のねらいや育みたい力などの考えを反映するなどし、教員と当館が協同実践した。また当館が地域の学習コーディネーターとなり、延縄漁師やフグ毒の研究者などフグを生業にしている人々が関わる授業を組み立てた。来館時には、学校での学習経験を振り返りながら様々なフグを観察し、また教室での発表会に備えて調べた成果を相手にわかりやすく伝えるテクニックを展示生物の解説イベントから探り、児童が制作した表現作品を自らが館内で「展示する体験」を実施した。

児童への事後アンケート調査の結果（回答14名）、「フグの理解」に関する4段階評価（「たくさんわかった」9名、「すこしわかった」4名、「あまりわからなかった」0名、「わからなかった」1名）において、半数以上が「たくさんわかった」と回答し、自由記述ではフグ毒に関する内容が半数を占めた。そして自己理解に関しての自由記述では、表現力や協働性が身に付いたといった記述がみられた。発表に向けクラスで何度も練習を重ねたことが協働的な取り組みを深めることに繋がったと考えられ、学校側のねらいである「児童が主体的及び探求的に学習に取り組むこと」の達成に加え、特に協働的に取り組み表現する力が身に付いたと考えられる。また水族館側の目的である「水族館の多様な利用として生き物や環境の学び」の達成と、新たに「表現方法を学ぶ機会」を提供することができた。

今後の課題は、地域連携を活かした学びを持続するため、連携先へのアンケートの回答率を向上させる方法を再検討することにより、その成果をプログラムへフィードバックして地域の方と継続的に繋がるよう心掛けたい。